

書 評

地人書館

シャロン・ローン著

オゾン・クライシス

評者 世古口 言彦*

Kotohiko Sekoguchi

今日では、フロンが成層圏のオゾン層を破壊し、地上に降り注ぐ太陽光の紫外線量を増加させ、皮膚癌の発生率を高めるほか白内障に罹りやすくさせるなど、数多くの弊害をもたらす要因となることの認識は定着したと思われる。これまで大気に放出されてきた多種多様の化学生成物質の中から、特にフロンが地上からはるかに離れた成層圏のオゾン量の増減に関わっているのではないかという疑問がどのようにして出てきたのか、その解決のための研究経過はどうであったかなど、この方面の専門家でなくてもぜひ知っておきたいという衝動に駆られた人は少なくないと思う。

本書は、アメリカのジャーナリストで科学・健康問題を扱っているシャロン・ローン女史の執筆によるもので、ジャーナリストとして取材した材料をもとに、ローランドとモーリーナによってフロンが成層圏のオゾン層を破壊する可能性を指摘した1973年3月から、1987年9月のモンリオール議定書の調印後に明らかにされた調査結果に基づいて規制の強化へと移行する1989年3月までの経過が、年月を追って記述されている。事実経過を単に羅列するのではなく、この問題に関与した大学研究者、企業家、政治家、評論家等それぞれの人物像に触れながらストーリーが展開されており、事柄は重大かつ深刻ではあるが、ノンフィクションの小説を読むような気軽さで読み通させる。

問題提起からフロンの世界的な使用規制もしくは廃止に至る過程からは、すでにわれわれが抱えている温暖化、酸性雨をはじめ、ロケットの飛散物による衛星の軌道空間の汚染問題等の問題解決への幾多の教訓を引き出すことができよう。

とりわけフロン問題の場合は、大気圏内の比較的身近に感じ取ることのできない現象だけに、直接的な利害関係にある業界はもとより社会一般の理解を得ることがいかに難しいかがよく記されている。フロンのよ

うに現代社会の仕組みを支える主要物質の使用に警告を発するということはきわめて勇気の要ることであり、フロンが持つ工業上の優れた特性しか知らなかった者にとっては、これを禁止するようなことは狂気の沙汰と映ってもやむをえなかったであろう。

従って、当然のようにフロンの危険性を最初に示唆したカリフォルニア大学のローランドとモーリーナの研究には大学の内外から圧力が掛けられた。研究の結果が反社会的であると受け取られるような場合、冷静に対処することにいつの時代でもまたどの国でも人間は大変へたである、ということ思い知らされる。

オゾン層の危機を理解させ、その保護活動を起こさせるまでの15年は学会、産業界、政界、NASA、自然保護団体、一般社会をも巻き込んで変転を極めるのであるが、いずれの局面においてもこれが日本であればどうなっていたか、と考えながら読むのも大変興味深い。

よく批判がましくいわれる日本の応用研究偏重の風土からでもこの種の問題意識が芽生え、途中の展開はかなり変わったものとなったとしても、同等の終決にまで到達しえたであろうか。外交を含めた政治活動と研究活動における展開の仕方の違い、別のいい方をすれば行動力のスケールの相違を再認識させられる。いろいろな点で、今後の日本の舵取りに対して教えられることが多い。

なお、本書の末尾には詳細な年表が添付されており、波乱に富んだ経緯を分かりやすくしてくれているのは、念入りに作った索引とともに重宝である。

*大阪大学工学部機械工学科教授

〒565 吹田市山田丘2-1